様式第１号（第７条関係）

江津市議会報告会実施報告書

<table>
<tr><td colspan="2">開催日時</td><td>2023 年 11 月 30 日(木)</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催場所</td><td>桜江総合センター</td></tr>
<tr><td colspan="2">出席議員</td><td>3 班　森脇悦朗、植田好雄、下谷忠広、渡辺信明
4 班　河野正行、藤間義明、坂田優美、植田圭介
オブ参加　森川佳英、多田伸治、坂手洋介、森元健二、山根兼三郎</td></tr>
<tr><td colspan="2">参加市民数</td><td>4 人（さくらえ地区小さな拠点推進協議会役員）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">実施内容報告</td><td>議会報告</td><td>9 月議会　予算決算、総務民生員会、建設経済委員会の格報告
5 月市民と語る会意見集約の市長申し入の回答（参考資料）</td></tr>
<tr><td>意見交換</td><td>1．災害の歴史について
①昭和 47 年災害で築堤整備され、平成 30 年に甚大な被害が発生。今までの経験や知識だけでなく、桜江全体で命を守る自主防災づくりを 5 地区が小さな拠点づくりを県の事業として設立した。設立するにあたり、桜江は合併後も 5 地区のつながりがあり抵抗感はなかった。
②問題は「人、マンパワー」である。会議はいつも同じメンバーで、人が足りないのが一番の課題。地域防災は、集落ごとに孤立する。地域ごとの自主防災を考える。そしてそれをまとめて全体の防災へ。

2．自主防災について
①早め早めの非難。そのための声掛け。平成 30 年では、夜中の 1 時には所長や消防団などの声掛けで高齢者は避難できた。9 割が山林で土砂災害やレッドゾーン指定。自主防災が中心になる。
②治水事業は、生活と命を守るためだが、地域の定住対策を合わせた治水対策が重要。
③ポンプ車、県より配備されたが、1 回も稼働していない。ポンプは委託者の扱いで地区の者は扱えない。（樋門は地区で扱うが）どの程度の効果があるのか分からない。

■長谷地区の防災は
①土石流が問題。避難所に行くまでが不安。
②我が家が一番で、避難所に行くという計画は難しい。
③要支援者などは、見守りと定期的な連絡が必要。
■谷住郷地区の内水は
①261 の嵩上げ、河川トンネルでバックウォータの心配はなくなった。
②江の川の樋門、閉めると農地からの吹き上げがある。
③河川トンネルや堤防の草刈り、高齢化で大変になっている。

3．若者定住について
人口は 2200 人で、出生数も一桁（3 人、4 人）。小学校も統合され 1 校。令和 2 年度に協議会を設立。
①若い人に関わってもらいたい。若手で空き家対策で、子供教育を中心にし</td></tr>
</table>

		た本屋を改装し「3Colors（カラーズ）」を開設。 ③担い手がいない。60才世代の子供(30代～40代)に帰ってほしい。そうした政策を、地域だけでは難しい。 ②若い人が帰りやすい環境づくり。地域でも働ける仕事をどうするか課題。 (議員からの意見) ①喫茶店を改修しているが、仕事をしながらなので大変。若い人が中心となる組織作りが課題。 ②外から受け入れるために、地域資源など有るものが届いていない。若者が求めるアンテナを張っておく必要がある。 ③農地付き空き家を求めている人もいるが、家財や仏壇が残っているのがネックになっている。 ４．高齢者の生活向上について ①65才以上のアンケートでは、移動販売、買い物支援が多い。 川戸以外は、商店ない。長谷は「まんてん」の移動販売。移動販売も誰が、どうする、地域コミュニティーで出来るのか、経営出来るか、利用はどうかという問題。 ②買い物サービスは、社協の車を利用し、ゆめタウン、キヌヤ、しまむらなどに、民氏委員がサポートする。今後も継続したい。 ③見守りの移動販売について、仕組みややり方を協議したい。 一件、一件を回れないため、元気な人の利用になっているが、リハビリも含めてどう組み合わせていくか、さらに、生活バスや三江線代替交通との連携が課題。
要望・意見等		（意見交換に含む）
その他 特記事項		なし

令和　年　月　日

江津市議会議長　藤間　義明　様

広報広聴特別委員会委員長　　植田　好雄　　㊞